



笑って暮らしているよ

さわ の ま す み
【澤野 真寿美・大阪府】

ジャニーズ系の容姿がご自慢だった祐輔は18歳で交通事故に遭った。脳に大きなダメージを負った祐輔に残されたものは命と聴覚と皮膚感覚だけ。

テニスに明け暮れ真っ黒に日焼けした少年は、静かに沈黙の世界に入ってしまった。遷延（せんえん）性意識障害という。

事故から13年。たくさんの看護師さんに支えられて今がある。

衰弱して体重が35キロまで落ち、懸命の看護でやっと40キロになった時、「祐ちゃんが40の大台に乗った！」と拍手してくださった看護師さんたち。20歳の誕生日、ベッドの横にはケーキと看護師さんたちの「ハッピーバースデー」の歌があった。祐輔なりの成人式だった。

在宅介護に向けて、医療的ケアの方法を細やかに教えてくださったのは若い看護師さんだ。

4年ぶりに戻ったわが家では、訪問看護師さんは限られた時間の中でバイタルチェック、浣（かん）腸、入浴介助などをテキパキと進めながら、「お母さん、疲れてない？」と家族にねぎらいの言葉を掛ける、まさにプロの仕事ぶりだった。

そして、今。祐輔は親の手を離れ、医療型施設「ベルデ」で仲間と共に暮らしている。ここには歩ける人は一人もいない。看護師さんと支援員さんのチームワークで重い障害を持った人たちの医療と生活を担う。

熱や発作にも迅速に処置してくださる。経管栄養だがホールに集まっての食事。夏にはスタッフに支えてもらってプールで泳いだ。クリスマス会ではポンポンを振って車椅子で踊った。バレンタインデーにチョコレートをちょっとなめさせてもらって、にこっと笑った祐輔の写真は私の宝物だ。

命には健常も障害もない。人間として向かい合ってくださる人たちがここにはいてくれる。

面会に行く車のハンドルを握りつつ、ふと「幸せだな」と思う。

お世話になった看護師さん、今お世話になっている皆さん、全員にお礼を言いたい。私たち家族はちゃんと笑って暮らしていますよ、ありがとう。